

大学生に求められる学士力と英語力

教育センター外国語教育推進部 特任准教授 原 隆 幸

キーワード：学士力・学士課程教育・グローバル人材・コミュニケーション能力・大学英語教育

1. はじめに

グローバル化が進む現在、外国語教育の拡充は多くの国々で課題とされており、各国で様々な取り組みがなされている。しかしながら日本の言語教育は遅れをとっている。特に、高等教育における外国語教育は遅れているように思われる。また、大学全入時代を迎え、近年の大学生の英語力を含む学力は低下してきている。これには、自主的に課題に取り組む意欲が低い、論理的に考え表現する力が弱い、日本語力、基礎科目の理解が不十分などの背景があることが明らかになってきている¹⁾。

一方、今日のグローバル化する社会に目を向けると、グローバル社会に対応できる人材が求められており、日本も例外ではない。その対象は社会人だけではなく、これから社会に出て行く大学生にも向けられている。このようなニーズに応じるため、日本は文部科学省を中心に過去数年に渡り、高等教育のあり方に関して検討を重ね、下記に示したように、さまざまな政策を策定している。

- 1) 「学士課程教育の構築に向けて」2008年12月
- 2) 「産学官によるグローバル人材の育成のための戦略」2011年4月
- 3) 「予測困難な時代において生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ」2012年3月
- 4) 「グローバル人材育成戦略」2012年6月
- 5) 「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて」2012年8月

本論文では、日本が育成しようとする、学士力があり、グローバル社会に対応できる人材を考えるにあたり、まず、大学の学士力を育成する学士課程教育に関する文部科学省の取り組みを概観する。次に、グローバル人材に関して背景などを概観する。その後、学士力の向上およびグローバル人材を育成するために大学の教養教育ができることを、特に英語教育に関して考察をする。最後に、これらを受け、鹿児島大学の共通教育課程における英語教育への示唆を挙げてみたい。

2. 学士力とグローバル人材

ここでは、まず、学士力に関わる学士課程教育について概観していく。「学士課程教育の構築に向けて（答申）」（2008）では、次のように背景などを述べている。

- …学士課程教育の構築が、我が国の将来にとって喫緊の課題であるという認識に立っている。
- 第一に、グローバルな知識基盤社会、学習社会において、我が国の学士課程教育は、未来の社会を支え、より良いものとする「21世紀型市民」を幅広く育成するという公共的な使命を果たし、社会からの信頼に応えていく必要がある。
- 第二に、高等教育のグローバル化が進む中、学習成果を重視する国際的な流れを踏まえつつ、我が国の学士の水準の維持・向上のため、教育の中身の充実を図っていく必要がある。
- 第三に、少子化、人口減少の趨勢の中、学士課程の入口では、いわゆる大学全入時代を向え、教育の質を保証するシステムの再構築が迫られる一方、出口では、経済社会から、職業人としての基礎能力の育成、さらには創造的な人材の育成が強く要請されている。
- 第四に、教育の質の維持・向上を図る観点から、大学間の協同が必要となっている。

このように述べた上で、具体的な改善方策としての「各専攻分野を通じて培う学士力～学士課程共通の学習成果に関する参考指針」で、**1. 知識・理解**として、(1) 多文化・異文化に関する知識の理解、(2) 人類の文化、社会と自然に関する知識の理解、**2. 汎用的技能**として、(1) コミュニケーション・スキル、(2) 数量的スキル、(3) 情報リテラシー、(4) 論理的思考力、(5) 問題解決力、**3. 態度・志向性**として、(1) 自己管理能力、(2) チームワーク、リーダーシップ、(3) 倫理観、(4) 市民としての社会的責任、(5) 生涯学習力、**4. 総合的な学習経験と創造的思考力**を掲げている（太字は筆者による）。

一方、グローバル人材に関してはどうか。「産学官によるグローバル人材の育成のための戦略」(2011)では、次のように現状と課題を述べている。

世界では、政治・経済をはじめ様々な分野でグローバル化が進み、加速度的に進展している。人間が作り上げた技術やシステムにより、ヒト、モノ、カネが国を越えて一層流動する時代を迎える中、地球規模で物事をとらえ、地球上のあらゆる人びとと協力し、地球規模の平和と幸福を追求することが不可欠となっている。

教育は、人が社会の中でよりよく生き、自己実現を図るためのものであるとともに、社会において、その人材が活躍し、その力が最大限発揮されるためのものである。このため、時代の流れとともに変化する社会に合わせて、教育自体も進化したものとなる必要がある。現代というグローバル社会においてはグローバル化がより進展する社会を見越し、日本人がグローバルに対応できる力を持つグローバル人材になることが求められている。

次にグローバル人材の定義であるが、同報告書は、「世界的な競争と共生が進む社会において、日本人のアイデンティティ²⁾を持ちながら、広い視野に立って培われる教養と専門性、異なる言語、文化、価値を乗り越えて関係を構築するためのコミュニケーション能力と協調性、新しい価値を創造する能力、次世代までも視野に入れた社会貢献の意識などを持った人間」としている。また、「グローバル人材育成戦略」(2012)におけるグローバル人材とは、次のような要素が含まれるものとしている。

要素Ⅰ：語学力・コミュニケーション能力

要素Ⅱ：主体性・積極性、チャレンジ精神、協調性・柔軟性、責任感・使命感

要素Ⅲ：異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティ²⁾

グローバル人材の概念に包含される要素の幅広さを考えると、本来、その資質・能力は単一の尺度では測り難い。しかし、測定が比較的容易な要素Ⅰ（「道具」としての語学力・コミュニケーション能力）を基軸として（他の要素等の「内実」もこれに伴うものを期待しつつ）、グローバル人材の能力水準の目安を（初歩から上級まで）段階別に示すと、例えば、以下のようなものが考えられる。

- ①海外旅行会話レベル
- ②日常生活会話レベル
- ③業務上の文章・交渉レベル
- ④二者間折衝・交渉レベル
- ⑤多数者間折衝・交渉レベル

グローバル人材は、外に目を向けるだけでなく、国内に目を向ける必要もあると思われる。近年、日本ではニューカマー外国人が増えてきており、日常、近所や街中で見かけるのは珍しくなくなってきて

いる。彼らと共生していく上でも、グローバル人材の能力は必要であると考えられ、この点から言うと、今後日本を背負って立つすべての大学生はグローバル人材になっていくことが求められるのではなからうか。

3. 大学の共通教育の役割

このように学士課程教育とグローバル人材を見ていくと、多くは大学における学士課程教育で培うことができる。特に、学士課程教育で培われる知識・理解としての「多文化・異文化に関する知識の理解」、「人類の文化、社会と自然に関する知識の理解」および汎用的技能としての「コミュニケーション・スキル」と、グローバル人材の要素である「語学力・コミュニケーション能力」、および「異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティ」は重なる部分である。これらは外国語教育、とりわけ英語教育を通して培うことができる。

英語の授業では、英語を話す国の人々の文化、考え方、習慣など教材を通して、また、教員（の経験談など）を通して指導できる。同時に外国を、海外の人々を見ることにより、日本や日本人としての自分を顧みることができる。さらに第2外国語を学べば、その機会は2倍になり、より多くの国々や人々の文化、考え方、習慣を学べるのである。その結果、学生は多角的なものの考え方を身につけていくことができるであろう。また、英語や第2外国語の教材は様々なトピックを扱っており、「多文化・異文化に関する知識の理解」に加えて、「人類の文化、社会と自然に関する知識の理解」も同時に身につけていける。こういった内容は「異文化コミュニケーション」関連の授業を通して身につけていける。または、大学にいる留学生たちと交流を持ち、接していくことで自然と身につけていけると思われる。

また、外国語（英語）を学習することを通して、自立学習を続ける土台となる4技能を磨き、学習方略を身につけ、学び続ける意欲や自信をつけることは、「生涯学習力」へと結びつく。これは英語に関わらず、さまざまな言語で求められるかも知れないが、英語で身につけておけば、他の言語にも応用が利くものである。

こういった取り組みは、文部科学省が2011年に出した「国際共通語としての英語力向上のための5つの提言と具体的施策」とも連動している。ここで掲げられている「求められる外国語能力とは」によると、下記に示すようである。

グローバル社会で求められる外国語能力とは、異なる国や文化の人々と外国語をツールとして円滑にコミュニケーションを図ることができる能力と言える。円滑にコミュニケーションを図ることができる能力とは、例えば、異なる国や文化の人々と臆せず積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度や、相手の文化的・社会的背景を踏まえた上で、相手の意図や考えを的確に理解し、自らの考えに理由や根拠を付け加えて、論理的に説明したり、議論の中で反論したり相手を説得したりできる能力などが挙げられる。

続けてコミュニケーション能力の育成に関して、次のように記している。

このようなコミュニケーション能力を育成するためには、講義形式の授業から、例えば、スピーチ、プレゼンテーション、ディベート、ディスカッションなどを取り入れることにより、生徒の言語活動を中心とした授業へと改善を図る必要がある。

この報告書は、初等・中等教育を含む英語教育全般に関して述べた報告書であるが、上記の引用箇所は大学の英語教育にも当てはめることができる。

4. 鹿児島大学の共通教育と英語教育への示唆

まず、異文化コミュニケーションに関する授業を学生が履修することが挙げられる。少なくとも日本人学生は全員履修し、多文化・異文化に関する理解を深める。同時に、この点は各外国語教育でも補っていく。

次に、英語だけではなく、それ以外の外国語を履修する。伝統的には、フランス語やドイツ語が挙げられるが、日本を取り巻く国々の言語である中国語や韓国語、またはロシア語など隣国の言語を学ぶのは、相互理解のためにも重要となる。その他、日本と関係のある中東の言語であるアラビア語、日系人の多い中南米で話されているスペイン語やポルトガル語も重要である。近年、日本国内の外国人集住地区では、多くの日系人労働者が出稼ぎに来ており、日本人と共生している。彼らが話す言語がスペイン語やポルトガル語である。そのため、後者の言語学習は重要となってくる。こういった英語以外の外国語を学ぶことは、異文化理解、国際交流の観点から、グローバル人材の要素の観点からも重要であると言える。

最後に、英語教育に関してである。英語教育は、学士課程教育にも、グローバル人材育成に関しても関わってくる重要な部分であることは上記3で示した通りである。「多文化・異文化に関する知識の理解」に加えて、「人類の文化、社会と自然に関する知識の理解」を促すために必要なのは、バリエーションに富んだトピックを扱っている教材を採用すること、または教員がそのような授業を心がけることである。指定教科書を使用することでレベルの統一を図ることはいい点であるが、指定教科書数が少ないときさまざまな知識の理解を十分に育むことが難しくなる。また、古い教科書には今にも通じる部分もあるが、現在起こっていること、現状を扱っていない点がマイナスとなる。これを補うには、英字新聞（デイリーのものや週刊のもの）などを授業で取り上げることで補っていく。

次にコミュニケーション能力を育成するために、スピーチ、プレゼンテーション、ディベート、ディスカッションなどを取り入れることは、コアの形式を採っている方式に当てはまっている。これはコア0の授業が担っている部分である。それ以外のコアでも4技能を技能別に担っているため、今後も期待される部分である。

ただ問題となってくるのは、どのレベルの英語を身につけさせたいのかという点である。現在、習熟度別のクラスを設け、学習目標を掲げているが、先ほど挙げた「グローバル人材育成戦略」(2012)におけるグローバル人材の能力水準の目安（初歩から上級まで）である①海外旅行会話レベル、②日常生活会話レベル、③業務上の文章・交渉レベル、④二者間折衝・交渉レベル、⑤多数者間折衝・交渉レベルを上手く学習目標の一部に組み込むことが挙げられる。次に、コアごとの学習目標を「CEFRj」³⁾などを参考に、かつ鹿児島大学の学生のレベルを検討した上で、Can-do指標を作成してはどうだろうか。また、学習目標を設定するのであれば、どれだけその目標が達成されたかを評価するシステムも必要となってくる。学習目標に合わせ授業を行っても、ただの筆記の期末試験では、正確に、学習目標を達成したかを評価できない。

こういったさまざまな点を見直しつつ、専任教員と非常勤教員で連携を図りながら、時に研修などを行って学習し、鹿児島大学の共通教育における英語教育を少しでも改善していければと思う。

5. おわりに

本論文では、日本が育成しようとする、学士力があり、グローバル社会に対応できる人材を考えるにあたり、まず、大学の学士力を育成する学士課程教育に関する文部科学省の取り組みを概観してきた。次に、グローバル人材に関して背景などを概観し、学士力の向上およびグローバル人材を育成するために大学の教養教育ができることを、特に英語教育に関して考察を行った。最後に、これらを受け、鹿児島大学の共通教育課程における英語教育への示唆をいくつか挙げてみた。

今回は、国の報告書をベースに学士課程教育とグローバル人材について考察してきたが、今後の課題は、鹿児島大学の英語教育に対し具体的な学習目標を考察し、実情にあったものを検証していきたい。

注

- 1) [調査] 深刻な大学生の学力低下 教員の6割問題視【Benesse（ベネッセ）教育情報サイト】
- 2) 本論文中では、「アイデンティティ」と「アイデンティティー」が混在しているが、これは各引用文献での表記の違いであり、本論文では原文のまま2つの表記を用いている。
- 3) 詳細は投野由紀夫（2010）に記されている。また具体的な成果物は下記よりダウンロードできる。
<http://www.tufs.ac.jp/ts/personal/tonolab/cefr-j/download.html>

参考文献

- 内田Gwen、伊藤美代子、日臺晴子（2002）「21世紀に求められる大学英語教育」The Report of Tokyo University of Fisheries、No.37、pp.19-28.
- 田中宏明（2011）「英語学士力と教育改善モデル－大学英語担当者の役割－」京都学園大学経営学部論集 第21巻第1号、pp.73-102.
- 投野由紀夫（2010）「CEFR準拠の日本版英語到達指標の策定へ」、『英語教育』増刊号 Vol. 59、No.8、pp.60-63.
- 原隆幸（2011）「大学生の学力変化と共に多様化する大学英語教材の役割」『異文化の諸相』第31号、pp.153-162.
- 文部科学省（2008）「学士課程教育の構築に向けて（答申）」中央教育審議会
- （2011a）「産学官によるグローバル人材の育成のための戦略」産学連携によるグローバル人材育成推進会議
- （2011b）「国際共通語としての英語力向上のための5つの提言と具体的施策」外国語能力の向上に関する検討会
- （2012a）「予測困難な時代において生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ（審議まとめ）」中央教育審議会大学分科会大学教育部会
- （2012b）「グローバル人材育成戦略（グローバル人材育成推進会議 審議まとめ）」グローバル人材育成推進会議
- （2012c）「新たな未来を気づきための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～（答申）」中央教育審議会

[調査] 深刻な大学生の学力低下 教員の6割問題視【Benesse（ベネッセ）教育情報サイト】
<http://benesse.jp/blog/20051201/p1.html>